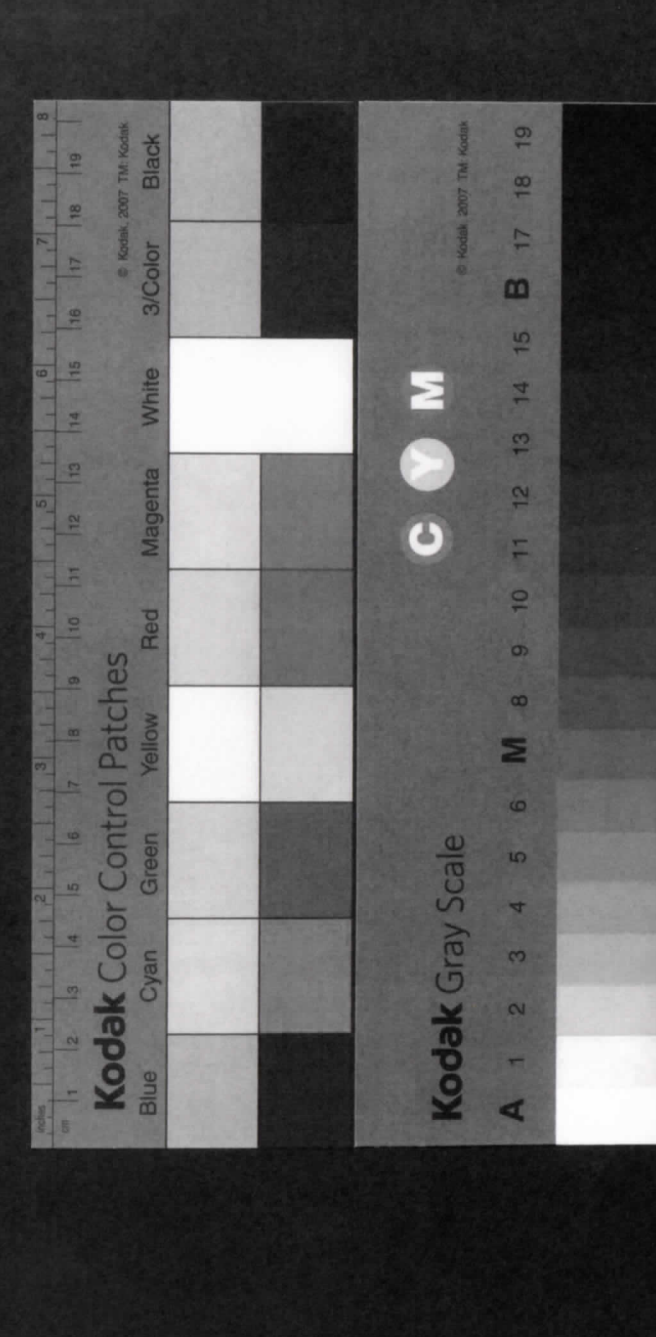
Z5-24
(602)
N 2000.7
2000002 06041
20000728
国立国会
12.7.28
図書館



著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。 国立国会図書館 2013年9月13日

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。 国立国会図書館 2013年9月13日

戦前の東京・横浜にあったホテル点描①

望翠楼ホテルについて

BOUSUI-RO HOTEL

外国人居留地比較研究グループ

はじめに

われわれグループは、これまで、日本のホテル史の初期について研究を重ね、本誌にその成果を発表して来た。

日本のホテルは、横浜、長崎、函館、神戸、大阪、東京および新潟が開港または開市され、外国人居留地が設定されて（新潟では居留地はなく、外国人は日本人と「雑居」した）、多数の外国人が日本にやって来るようになってはじめて開業したといってよい。したがって、われわれグループは、この7つの都市につき、開港または開市から、1899年（明治32年）7月の条約改正―これにより、開港・開市場が全部撤廃され、外国人居留地も消滅した―までの数十年間につくられたホテルにつき研究してきたものである。

ちなみに、7つの都市は次の時期に開港または開市となった。

1859年7月1日（安政6年6月2日）横浜、長崎および函館が開港。

1868年1月1日（慶応3年12月7日）神戸、大阪が開港（大阪は当初は開市となり、8ヵ月後に開港に改められた）

1869年1月1日（明治元年11月19日）東京が開市、新潟が開港。

開港場では埠頭、税関といった貿易に必要な施設が設けられるが、開市場にはそのような施設がなかった。東京にいた外国商人は、横浜の施設を利用したのである。

いずれにせよ、われわれグループのこれまでの研究対象は、7都市にあったホテル―横浜などでは1859年7月から1899年7月までの40年間、神戸・大阪については1868年1月から1899年7月までの31年半、東京・新潟については1869年1月から1899年7月までの30年半につくられたホテル―であった。われわれは主として極東、とくに日本にいた外国人を網羅した外国人人名録（香港や横浜で毎年発行されていた）に準拠し、他の内外の資料を参考にし、あくまでも実証主義的な研究を目指した。

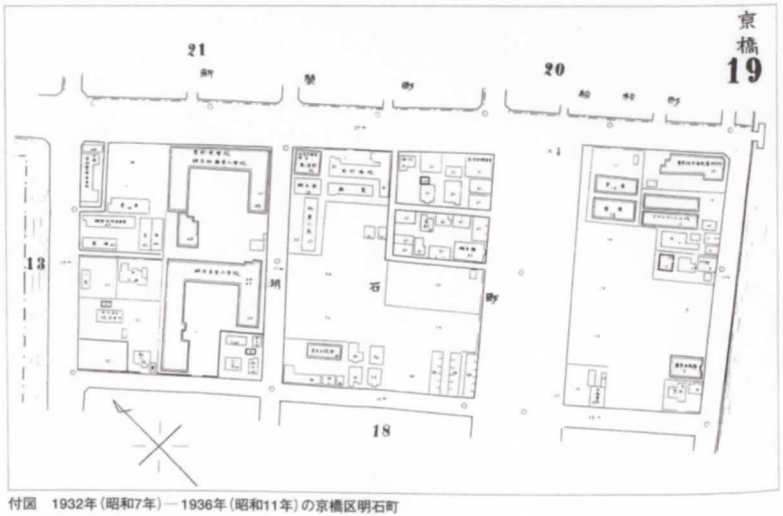
東京については、これまでは、前述のように1869年から1899年までの期間に開業したホテル―最初は築地に建設された外国人居留地やその周辺につくられ、やがて居留地域外にもオープンするようになった―を取り上げた。われわれグループは、今後は居留地制度廃止後、第二次大戦の勃発までの東京と横浜につくられたホテルに研究対象をひろげる。今月号の本誌に発表させて頂く一文は、居留地廃止後の東京にあったホテルの一つに関するもので、われわれの研究の最初の成果である。研究にはあくまでも実証的態度を貫いたつもりであるが、まだ不備な点もあろう。今後、少しずつ研究を深め、正確さを高めて行きたい。

今回は、大森にあった望翠楼ホテルを取り上げるが、まず、これまでの研究成果をわかりやすく表にまとめたのを御披露したい（付表）。実際には、1915年（大正4年）開業の東京ステーションホテルまで掲げた。ある時期までは築地居留地にホテルが集中していたが（築地精養軒ホテルは築地居留地域外にあったが、居留地にきわめて近接していた）、次第に東京の他の地域―現代の区制でいえば千代田区、台東区、港区、大田区、中央区―にもホテルが開業するようになったことが明かとなるであろう。

付表は、外国人居留地比較研究グループのある協力者（川崎晴朗）が本稿とは関係なく独立に作成した。

一言付け加えておくが、この付表は完成の域に達していない。それは、ひとえに資料がきわめて不十分なためである。一例を挙げよう。

鏑木清方は、1934年（昭和9年）9月に発表した随筆「築地川」で次のように述べている（この随筆は、山田肇編『随筆集　明



付図　1932年（昭和7年）―1936年（昭和11年）の京橋区明石町
（出所）東京都中央区立図書館編・刊「中央沿革図集　京橋編」（1996年）

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。 国立国会図書館 2013年9月13日

付表
東京にあった初期のホテル（1915年までに開業したもの、○印は築地居留地の域内にあった）

付表作成者　川崎晴朗

ホテル名（カッコ内は英・仏名）	アドレス	開　業	閉　業
○築地ホテル館（Yedo Hotel）	軍艦操練所跡	1868年8月16日（慶応4年6月28日）部分的に開業	1871年12月31日（明治4年11月20日）休業、その後焼失
○オテル・デ・コロニー（Hotel des Colonies）	南小田原町3丁目、のち居留地18番	1869年2月または3月	1872年4月3日（明治5年3月26日）焼失
○江戸ホテル（Yedo Hotel）	相対借り地域、のち居留地17番A	1872年後半	1879年（明治12年）1月19日焼失
○オテル・デ・コロニー（再建）	新栄町5丁目6～8番地、のち居留地18番	1873年（明治6年）後半	1875年（明治8年）
○オテル・デュ・グラン・ヴァテル（Hotel du Grand Vatel）	新栄町5丁目3番地	1874年（明治7年）ごろ	1875年（明治8年）ごろ
○東京ホテル（Tokyo Hotel）	居留地33番A	1874年（明治7年）	1882年（明治15年）初頭
築地精養軒ホテル（Tsukiji Seiyoken Hotel）	采女町32、33番地	1876年（明治9年）6月	1923年（大正12年）9月1日
東京ホテル（Tokyo Hotel）	日比谷門見付（麹町区有楽町3丁目2番地）	1887年（明治20年）6月23日	1899年（明治32年）3月以前
○クラブ・ホテル（Club Hotel）	居留地1番	1890年（明治23年）5月	1892年（明治25年）または1893年（明治26年）
帝国ホテル（Imperial Hotel）	麹町區内山下町1丁目1番地	1890年（明治23年）11月3日	
○ホテル・メトロポール（Hotel Metropole）	居留地1番（明石町1番地）	1892年（明治25年）または1893年（明治26年）	1909年（明治42年）7月
○オテル・サントラル（Hotel Central）	明石町32番地、のち明石町12番地	1901年（明治34年）	1920年（大正9年）末ごろ
上野精養軒ホテル（Uyeno Seiyoken Hotel）	上野公園	1902年（明治35年）	1917年（大正6年）10月1日
ホテル愛宕館（Hotel Atago-kan）、のち東京ホテル（Tokyo Hotel）	芝區愛宕山	1902年（明治35年）ごろ	1914年（大正3年）ごろ
望翠楼ホテル（Villa Belvedere、のちBosui-ro Hotel）	大森新井宿	1912年（明治45年）6月	1931年（昭和6年）または1932年（昭和7年）
日比谷ホテル（Hibiya Hotel）、のち東京ホテル（Tokyo Hotel）	麹町區有楽町1丁目3番地	1912年（大正元年）12月以前	1919年（大正8年）ごろ
東京ステーションホテル（Tokyo Station Hotel）	東京駅構内	1915年（大正4年）11月2日	

治の東京』（岩波文庫、1989年）の87ページに収められている）。

田村病院は今もあるが、そのならびにホテル・オリエンタルがあった。

田村病院は、1899年7月に築地居留地が廃止されたあと、旧居留地31番（京橋区明石町31番地）の一部につくられた病院である。したがって、ホテル・オリエンタルは同じ明石町31番地あるいは31番地に隣接する同町30、32、33または34番地にあったと考えられる。付図は1930年代の京橋区明石町の一部を示すもので、田村病院病院はあるが、ホテル・オリエンタルはもはやない。同ホテルは、あるいは居留地33番A（のち明石町33番地ノ1）にあった東京ホテルの後身かと考えられるが、何の関連資料も発見されていない。

望翠楼ホテルについて

1

望翠楼ホテルのあった大森入新井の高台は、関東大震災後に人口が急増し、宅地化が進んだが、それまでは静かな田園地帯であった。望翠楼ホテルはそのころ呱々の声を挙げたのである。

現在の大田区は、1947年（昭和22年）7月1日、大森区と蒲田区が合併して成立した。現在の大田区域は、明治初年東京府荏原郡に編入されたが、47の村が点在していたという。1889年（明治22年）4月1日、9ヵ村にまとめられたが、のち望翠楼ホテルが建設されたあたりは入新井村といった。1897年（明治30年）から1928年（昭和3年）にかけて、9ヵ村全域に町制が敷かれた。入新井村が入新井町となったのは1919年（大正8年）8月1日である。したがって、ホテルは、まだ入新井が村だったころの誕生である。

筆者が望翠楼ホテルにはじめてふれたのは、全国市長会の雑誌『市政』の1985年10月号である（108ページ）。当時筆者は、築地居留地にあったホテルについて研究をはじめており、その最初の成果を同誌1985年8、9、10および12月号に載せたのである。

この研究では、香港や横浜で発行されていた外国人名録を多用した。築地居留地域外の初期のホテルについても言及し、その一つが望翠楼ホテルであったが、"Bosui-ro Hotel"が大森にあったことは、1919年版ジャパン・ガゼット人名録で知った。K・ナカソノという人物がマネージャーである（442ページ）。のち、大森には大森ホテル（Omori Hotel）もできる。

1920年版以降の記載は次の通り。

1920年版　306ページ
1921年版　248ページ
1922年版　380ページ
1923年版　180ページ
1924年版（保存されていない）
1925年版（　〃　）
1926年版　768ページ
［この版から大森ホテルが登場。所有者イノハラ。「大森」の項にあるが、正確なアドレスは不明］

1927年版　786ページ
1928年版　472ページ
1929年版　628ページ
1930年版　636ページ
1931年版　706ページ
1932年版　（保存されていない）
1933／34年版では望翠樓ホテルは載っていない。大森ホテルは掲載されている（606ページ）。

念のため1940年版および1941／42年版を見たが、やはり望翠樓ホテルはなく、大森ホテルは存続している（それぞれ525、567ページ）。

以上がジャパン・ガゼット人名録にある望翠樓ホテルの全記録である。1932年版が保存されていないため、このホテルが記載されなくなったのが1932年版か1933／34年版のいずれであるか判明しない。前者であれば1931年（昭和6年）、後者であれば1932年（昭和7年）または33年（昭和8年）の閉業であろう。

筆者は、ジャパン・ガゼット人名録により、大森に望翠樓という名のホテルがあったことを知り、そして、1919年版に初登場するので、1918年（大正7年）に開業し、また1931年ないし1933年に閉業したのであろう、と想像した。そして、1926年版から大森ホテルが人名録に掲げられるので、1925年（大正14年）ごろ、同じ大森にもう一つホテルが開業し、望翠樓が営業をやめたあとも存続していた、あるいは二つのホテルは競合関係にあったのかも知れないな、などと思った。当時はそれ以上の情報はなかったが、のちに述べるように、筆者は大森山王の生まれである。望翠樓ホテルのことは、それ以来ずっと筆者の脳裡に残り、いずれもっと詳しく調査したいという気持ちが消えたことはなかった。

＊　＊　＊

大田区史編さん委員会編の『大田区史』（東京都大田区刊）が最近刊行の運びとなった。1996年刊行の下巻を読んでいると、第5章「大正期の大森・蒲田・羽田」の第6節に、「大森丘の会のこと」という小節があるのに気付いた（356—8ページ）。この第5章第6節は筑波大学の大濱徹也教授および大田区歴史研究会の山本定男会長が執筆されたものであるが、「大森丘の会のこと」に望翠樓ホテルのことが出てくるのである。

少し長いが、要点を再録させて頂く。

望翠樓ホテルは、大森駅西口の丘の上にあり、明治末から大正期にかけ、麻布の竜土軒、日本橋のレストラン・ユーノス、銀座のブランタン、数寄屋橋の笹屋などとともに、若き芸術家たちが種々な会合をもち、新時代の文学・芸術運動の発信地として名をなしたひとつである。

ホテルは、大森天祖神社の南西、新井宿愛宕山の高台（現山王3丁目34番）にあって、大正元年（1912）に建てられた。洋館2階建ての客室20、室毎に浴場・便所を備え、当時としてはほとんど他に類を見ない高雅なホテルであった。食事その他いっさい純洋式で、食堂は優に100人を収容する設備があり、庭園も広く、特に眼下に東京湾の翠色を一望におさめ、まさに望翠樓の名に背かなかったといわれる。ここでは、馬込村に文士たちが集まってくる前に、近隣の芸術家や知識人たちが「大森丘の会」と名づけて度々会していた。会合といっても堅苦しいものではなくて、心安い者同士の談話会であった。…

『大田区史』は、そのような芸術家、知識人として小林古径（画家）、川端龍子（画家）、伊東深水（画家）、渡辺文子（画家、竹久夢二の先行者渡辺与平の未亡人）、藤井達吉（伝統工芸家）、白瀧幾之助（油絵）、真野紀太郎（水彩画）、橋田東声（歌人）、日夏耿之助（詩人）、長谷川潔（洋風木版画家）、片山広子（歌人、翻訳家）などを挙げる。それは、1918年（大正7年）以前の情況であったらしい。日夏耿之助が、この大森丘の会では「音楽家は詩人と伍し、小説家は翻訳家に交ってゐた…」云々と書いているという。丘の会の雰囲気がよくわかる。また、この会に場所を提供したホテルの雰囲気—純洋式で高雅、東京湾を一望できた—もわかるような気がする。1918年後も、望翠樓ホテルは芸術家や知識人にとって、こよないくつろぎの場所を提供したことであろう。

2

それでは、望翠樓ホテルはいつ開業し、いつ閉業したのであろうか。『大田区史』は「大正元年（1912）に建てられた」という。御高承の通り、1912年7月30日、明治天皇が崩御、大正天皇が即位、この日から「大正時代」がはじまる。『大田区史』をそのまま読むと、ホテルは大正元年の竣工であるから、それは、1912年7月31日ないし同年末までの期間のいつか、ということになる（1912年7月30日までは明治45年である）。また、『大田区史』は、望翠樓ホテルがいつ営業を停止したのかの点にはふれていない。

しかし、ジャパン・ガゼット人名録にこのホテルがはじめて掲げられるのは、前述のように1919年版であり、この事実から考えると、開業は1918年（大正7年）ということになる。『大田区史』のいう1912年より6年おそい。

＊　＊　＊

「ホテル」の定義は困難であるが、筆者は、少なくとも日本に関する限り、最初それは外国人用の宿泊施設という意味で使用された、と考えている。「はじめに」で述べたことであるが、日本では、1859年7月1日に横浜、長崎および函館が開港され、1868年1月1日になって神戸が開港され、大阪が開市された（大阪も、のちに開港場に改められた）。その後、明治維新後の1869年1月1日、東京が開市され、新潟が開港された。開港場・開市場には外国人居留地がつくられ、日本で最初のホテルは、これら居留地で、外国人のために開業したのである。このことは、ごく最近まで、日本人のホテル観に強い影響を与えつづけたと思う。そして、日本各地には、外国人が多数やって来る前から、さまざまなレベルの旅館があって日本人自身の需要は十分に満たされていた。居留地でホテルが開業しても、日本人は好奇心をもったであろうが、別にホテルを利用する必要性はまったくなかった。したがって、日本人は日本人で勝手に日本旅館を、外国人は外国人で勝手にホテルを利用するという状況が、日本の開国後も長くつづいたのである。

東京についていえば、それがまだ江戸であったころ、神戸・大阪と同じく1868年1月1日に開市される予定であったため（実際には1年間延長された）、幕府は1867年9月、築地で「外国人旅館」の建設に着手した。維新後に竣工したが、「築地ホテル館」とし

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。　国立国会図書館　2013年9月13日

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。 国立国会図書館 2013年9月13日

て開業、英語名は「江戸ホテル」(Yedo Hotel)であった。

筆者は、築地ホテル館について『続通信全覧』を含むさまざまな資料を基礎にして研究し、その集大成を、Hotel Reviewの1992年1月—7月号に発表したが、このホテルが当初は「外国人旅館」と称され、建設が進められた事実にも、開国当時の日本では「ホテルは外国人用の旅館」と考えられていたことが端的にあらわれていると思う。

3

それはともかく、望翠楼ホテルが1912年の発足にせよ、1918年のスタートにせよ、筆者は、いまでは、これは本来は外国人向けに建設されたホテルであった、と考えている。築地ホテル館のつくられた幕末・維新当時より40数年、もちろん日本の芸術家、知識人もあちこちのホテルを社交の場とし、「文学・芸術運動の発進地」として利用するようになっていた。しかし、筆者は、望翠楼ホテルは、基本的には外国人のため建設され、経営されたと考えるのである。

この考えに基づき、筆者は国立国会図書館で当時のThe Japan Timesをマイクロフィルムで閲覧することとした。東京で創刊されたもので、望翠楼ホテルのように東京にあったホテルなら、外国人のために広告を出しているのではないか、あるいは開業・閉業、拡張工事などにつき記事になっているのではないか、と考えたのである。

結論からいえば、望翠楼ホテルは、1912年6月13日付The Japan Timesにはじめてその広告が掲げられている。ただし、ホテル名はVilla Belvedereである。日本語ではそのころから「望翠楼ホテル」だったのであろうか。1912年6月13日付の英字新聞に広告が載ったということは、その数日前か10数日前に開業したということであろうか。いずれにせよ、1912年6月はまだ明治45年であって、まずいえるのは、『大田区史』が「大正元年に建てられた」といっているのは誤りであり、「明治45年(1912)」とすべきであるという点である。

Villa Belvedereは一時閉鎖されたようで、1912年12月3日付まで毎日広告が掲げられているが、何故か翌4日付から消えている。

さて、1913年4月15日付 The Japan Times は、4月20日、Bosui-ro Hotel (Villa Belvedere) が開業します、という広告を掲げた(第5面)。同じ広告が、同じ新聞の4月20日、すなわち開業の日までつづく。

Villa Belvedereであったころのホテルは、広告では"Private Boarding House & Hotel"となっている。外国人の長期滞在者用のホテルとして建設されたと思われる。広告には、「丘陵、海および村(新井宿のことであろう)の素晴らしい眺めをほしいままにする」(Commanding a splendid view of Hills, Sea & Village)、「横浜・東京間で最も健康的な場所」(Healthiest Location between Yokohama and Tokyo)、「外国人が監督するおいしい料理」(Excellent cuisine under foreign Superintendent)、「安いお値段」(Rates Moderate)などのキャッチ・フレーズがあり、さらに「ローン・テニス用コート建設中」、「ライフル射撃場」(Rifle Range)などとある。当時、大森山王といえば静かな田園地帯であった。このホテルは、東京と横浜の外国人を閑静な環境、そして料理やスポーツ

施設で引きつけ、楽しんでもらおうとしたのであろう。

"Belvedere"は本来はイタリア語で、「展望台」という意味である("vedere"は「見る」の意、"vettura Belvedere"は「展望車」)。英語になったのは16世紀末で、意味は同じである。大森の高台—少なくとも明治末ないし大正はじめごろ、少なくとも1923年(大正12年)9月の関東大震災までの—は、たしかに「展望台」だったのであろう。日本語のホテル名「望翠楼」も同じ趣旨でつけられたのであろう。このホテルの広告に、「望」はviewing、「翠」はverdure、そして「楼」はelevatedを意味するという解説付きのものが多いが、まさに眼下に東京湾の翠色を一望におさめる高台のホテルであったと思われる。

しかし、ホテルは英語名Villa Belvedereとして1912年6月ごろ発足したが、前述のように一時閉鎖され、1913年4月20日、"Bosui-ro Hotel"として再出発する—広告からはそのように読める。

以下、The Japan Timesに載った広告を眺めて行きたい。諸者には、筆者のホテル史研究にしばらくおつき合いをお願いしたいのである。

4

筆者は、望翠楼ホテルがジャパン・ガゼット人名録についてはようやく1919年版になって掲げられたため、このホテルは、当初は日本人向けであって、外国人向けの設備はなかったのかも知れない、と考えた。しかし、念のため国会図書館で1917年のThe Japan Timesを借りたところ、ホテルの広告がひんぱんに出てくる(例えば、4月は3日、6日、8日、11日、12日、15日、20日、22日、27日、29日付、各第2面)。筆者の考えは訂正せねばならなくなった。1916年の新聞にも望翠楼ホテルの広告が多い。数日置きに出ている(第2面だったり、第7面だったりするが)。1915年のThe Japan Timesはどうか。同じである。1914年も同じ、1913年も同じである(Hotel Bosui-roでなく、The Hotel Bosui-roとなっていることもある)。これは『大田区史』のいうように1912年で、同書は大正元年とわざわざいっているのであるから、1912年7月31日ないし同年末の間の開業なのかな、と思った。ところが、1912年7月1日付にVilla Belvedereがある(第5面)。当時はまだ明治45年である。同年6月13日付の広告が最も古いものであることをつきとめた(前述)。

前述のように、広告文から考えて、本来このホテルは外国人の長期滞在者用につくられたのであろうが、数カ月でいったん閉業したらしい。1913年1月1日のThe Japan Timesを見ると、このホテルの広告は見当たらない。2月、3月とマイクロフィルムを回してみたがない。1913年4月15日付になると、前述したように、Bosui-ro Hotel (Villa Belvedere) が同月20日に開業するという広告が出てきた(第5面)。写真も添えられているが、小さすぎて御紹介できない。同じ広告が、同月20日まで毎日載っている。21日は休刊日であったが、22日からふたたび載るようになり、これは5月に入っても同じで、11日付まで、毎回「今月20日に開業」(Now open from 20th inst.)とある。"inst."では5月になってしまい、誤りである。同一の広告文を、5月になっても修正せず使っていたのである。6月7日、広告がふたたび載るが、The Hotel Bosui-roとなっている(第2面)。

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。 国立国会図書館 2013年9月13日

それはともかく、Villa Belvedereとして発足した望翠楼が、なぜ間もなく閉業したのかわからない。数ヵ月をかけて施設の拡充をはかったということであろうか。

東京近郊にリゾート・ホテルをつくるという狙いはよい。広告も英字新聞にくり返し掲載した。しかし、おそらく十分な数の外国人を集めることができず、もっと彼等の要望にマッチしたホテルに改装したのではないか—と筆者は想像する。あるいは、経営者の交替でもあったのか。

—再開されたホテルの広告を見ると、「大森駅の真向かい」(Just opposite Omori Station)、「高台に位置し、素晴らしい眺めをほしいままにし、1年を通じて美しい風景に富む」(Situated on high ground commanding a magnificent view, rich in beautiful scenery throughout the year)、「安いお値段、最高の施設」(Moderate charges and best accommodations)といった惹句が並ぶ。期待通りに外国人が東京や横浜からやって来たのであろうか。少なくとも、大正期の日本の文化人がこのホテルに集まり、このホテルを愛したことは間違いないのであるが、外国人はどうだったのか。外国人は予定通りには来なかったのか。

望翠楼ホテルは、1923年(大正12年)9月の関東大震災後も営業をつづけた。しかし、いつ閉業したのかはわからない。ジャパン・ガゼット人名録から、1931—33年の間らしいと想像できるのみである。望翠楼ホテルがどのように生涯を終えたのか、『大田区史』もふれていないし、営業が不振であれば、ホテルとしても新聞広告もひんぱんに出す訳にいかないであろう。

筆者は、1933年(昭和8年)10月11日、大森区山王2丁目1910番地で生まれた。現在の住居表示法では、大田区山王2丁目19番地である。筆者の両親は、結婚後しばらく芝に住んでいたが、1933年のはじめ、大森駅西口に近いあたりに引越して来て筆者が生まれたのである。母親は1913年(大正2年)7月の誕生であるが、まだ健在で記憶力が強い。筆者に対し、数年前、はっきりと「山王に移ったとき(1933年初頭)、望翠楼ホテルなぞなかった」と「証言」した。たしかに、この程度のことなら、80歳を過ぎていても記憶しているのであろう。しかし、ホテルがいつ閉業したか、それ以上正確なことはわからないままである。1931年(昭和6年)か1932年(昭和7年)か、どちらかな、と想像するのみである(母親の記憶力を信じ、「付表」では閉業日を「1931年または1932年」とさせて頂いた)。

5

すでに述べたことであるが、大森山王は、望翠楼ホテルが営業していたころ、すなわち1912年(明治45年)から1931、2年(昭和6、7年)の期間、とくに1923年(大正12年)9月の関東大震災までは、本当に静かな田園地域であったらしい。これは『大田区史』を読んでも想像できるのであるが、たまたま1975年(昭和50年)9月22日付読売新聞の都民版に山王についての記事が載った。20年以上前の記事であるが、それまで「発展性のない、雑然とした眠ったような町」といわれたこの界隈が、少しずつ変ぼうを見せているという。

大森駅は1876年(明治9年)の開業であるが、待合所は東京

清側の東口にしかなかった。山手の山王の側(西口)になく、こちら側に住み付いた人々に不便であった。彼等は1906年(明治39年)、「倶楽部」を結成、2千円を集めて駅に提供、これで山王側に待合所ができたという。

さて、読売新聞は、この「倶楽部」は1939年(昭和14年)社団法人となり、初代理事長が清浦奎吾であったという。社団法人になる前の「倶楽部」は、ときには望翠楼ホテルで集まり、会議を開いたり、食事を楽しんだりしたのであろうか。「大森丘の会」よりあとに出来たとしても、あるいは丘の会からこの倶楽部に移ったメンバーもいたかも知れない。

大森山王には、すでに上流社会が出現しており、望翠楼ホテルのような施設を利用したことであろう。読売新聞は、大森生まれの大田区助役(当時)、志村金松氏の「天気のよい日は、確かに房総の山々も一望されました」という回想を伝えているが、昭和のはじめまでは、このような、すばらしい眺望を楽しめる高台に、閑静な高級住宅が散在し、ホテルがあったのである。ホテルだけではない、料亭などもあった。1884年(明治17年)に造成された大森八景園(3万3千平方メートル)の料亭はとくに有名であったが、大正の末に姿を消した。時期的に見れば、望翠楼ホテルはこの料亭に取って替わるように開業したことになるのであろう。

東京市心や横浜に住む日本の上流社会の人々や外国人は、望翠楼ホテルのような設備の誕生を歓迎したことであろう。眺望を楽しみながら「おいしい料理」を口にしたり、テニスやライフル射撃に興じることができる。現在、都心からこの距離にこのような施設があったら—と考えてみるだけで楽しい。

しかし、外国人はともかく、大正時代といえば、上流の日本人を除けば、このようなリクリエーション施設を思うように利用する人はまだ少なかったのであろう。

大正時代はもちろん、長い昭和時代も終わった。20年以上前、昭和の末期に「発展性のない、雑然とした眠ったような町」といわれた大森も、その後は目覚めたのであろうか。

—現在、大田区山王1丁目にホテルモントレ山王がある。ブルーガイド編『全国ホテルガイド』(実業之日本社、1996年)を見ると、大田区には計15のホテルがある。

6

ところで、The Japan Timesで望翠楼ホテルの広告探しをしたのであるが、同紙には、東京や横浜にあった他のホテルも広告を載せている。日本各地のホテルもしかりである。この点について述べてみたい。

1912年(明治45年)1月のThe Japan Timesには、望翠楼ホテル(Villa Belvedere)の広告は当然のことながら載っていない。1月5日付を見ると、その第5面に帝国ホテル、東京ホテル(1904年ごろまで「ホテル愛宕館」といった)、さらに横浜のグランド・ホテル、箱根宮ノ下の富士屋ホテル、日光の金谷ホテル、日光ホテルおよび熱海ホテルが広告を掲げている。1月19日付から築地精養軒ホテルが加わり、東京にあった3つのホテルが広告を載せたことになる。6月5日付には鎌倉の海浜ホテルの広告が、6月12日付から敦賀ホテルの広告が加わる。そして、前述のように、6月13日付で

Villa Belvedereの広告がはじめて載るのである。くり返しになるが、Villa Belvedereの広告は同年12月4日付から載らなくなるが、12月8日付から日比谷ホテルの広告が載りはじめる。筆者は、このホテルの開業を1913年（大正2年）7月と考えていたが、実際には1912年（大正元年）12月であったのであろう。「付表」ではそのように改めてある。

1913年に入ると、The Japan Timesの3月20日付から静岡の大東館ホテルが広告を出しはじめる。

同年5月ごろから、個々のホテルが広告を出すことが少なくなり、日本ホテル協会の会員ホテルのリストが載るようになる。当時、東京では帝国ホテル、築地精養軒ホテルおよび東京ホテルがこのリストに載っている。広告を出しているホテル—熱海ホテル、日比谷ホテル、伊香保の橋本ホテル、またシーズン中のみ軽井沢の万平ホテル—は、当時は非会員ホテルであったのか。

このように、英字新聞もホテル史の資料となり得る。いずれ、The Japan Timesをもっと組織的に閲覧することとしたいが、もちろん広告が載りはじめたからといって、ホテルがそのとき開業したと即断するのは禁物である。同様に、広告を出さなくなったから閉業したとは限らない。もちろん、閉・開業について記事になれば、それは信頼に足りる情報であるが、そのような記事は出ないことも多いであろう。

ちょっとにわかに信じられない惹句が広告に載ることがある。前述のように、築地精養軒はThe Japan Timesに1912年1月からしばしば広告を載せるようになったが、もちろん同ホテルがそのころ発足したためではない。それどころか、築地精養軒の広告に、開業日、改築日が入っていることが多い。例えば、1912年11月1日付同紙の第5面を見ると、Tsukiji Seiyoken "Estabilished 1869 Rebuilt 1911"とある。

筆者は本誌にも、『市政』にも、築地精養軒の歴史について何回か研究成果を発表した。まとめるならば、(1)精養軒は1872年4月3日（明治5年2月26日）馬場先門前で開業したが、その日に焼失した、(2)同年6月ごろ、木挽町5丁目3番地で再開（1872年6月20日＝明治5年5月15日付の『日新真事誌』に広告が載っている）、(3)1873年（明治6年）、采女ヶ原（うねめがはら）に建物を新築、ここに移る、(4)1876年（明治9年）6月、ホテル併設につき許可を得た、(5)改築のため1907年（明治40年）、精養軒を取りこわし、新館が1909年（明治42年）11月落成、(6)間もなく新館の増改築に取りかかり、1912年（大正元年）後半に完成した、というものであり、「開業が1869年、改築が1911年」というデータはどこからも出てこない。とくに、レストランでなく、ホテルとしての歴史に限るならば、築地精養軒ホテルは1876年なかばに正式許可を得て発足した（実際には、木挽町5丁目で営業していたころから希望する外国人を宿泊させており、采女ヶ原に移ったあとも、正式許可を貰う前から宿泊施設があった）。

したがって、築地精養軒ホテルの広告にあるデータは到底採用できない。「付表」でも筆者の研究成果に基づく日付を書き入れた。

［注］築地精養軒に関し、本誌に載せた研究は、岩倉具視との関連で1992年11、12月号、ヤン・レツルとの関連で1993年1—12月号、1994年2月号、またカール・ヤーコブ・ヘスとの関連で1994年4月から断続的に発表した（とくに1995年2月、10月および12月号を参照されたい）。

＊　＊　＊

初期の一流レストラン（和洋風を問わず）も新聞・雑誌によく広告を載せたので、歴史研究上の貴重な資料となる。筆者は1912年ごろからのThe Japan Timesを閲覧したが（その目的は望翠楼ホテルの広告探しであった）、レストランやカフェの広告もあった。1912年、銀座のRestaurant Francaisがあり（所有者J. Cotte）京橋南鍋町2丁目のCafe Paulistaがあった。後者については、ブラジルのサン・パウロ州政府が後援している（patronize）日本最初の真のカフェである、との惹句がある。1913年に入ると、4月3日付から丸の内の中央亭というレストランの広告が掲げられるようになる。

このような、英字新聞からレストランの歴史をフォローすることもやって見たいと思う。

7

筆者は、望翠楼ホテルが、「大正デモクラシー」の一象徴のように思える。明治末から日本社会の各分野に自由主義・民主主義の傾向が見られるようになった。その背景には、都市中間層の増大があった。最初は「普通選挙の実施」を中心的なスローガンとする政治的自由を求める動きであったが、これが社会・文化面での自由へと拡大して行く。『大田区史』のいうように、若き芸術家たちが会合し、それが新時代の文学・芸術運動の発信地となる。望翠楼ホテルの「大森丘の会」はその一つであった。

いかにせん、現代とは異なり、ホテルを利用し、宿泊したり、食事をしたり、レクリエーション施設を利用したりしてくつろぎの時間を過ごすという習慣は、明治末から大正の日本には、東京であっても一般の人々の間でまだ根付いていなかったし、在日外国人の数も少なかった。望翠楼というリゾート・ホテル・タイプのホテルが成功する素地はまだほとんどできていなかったのである。狙いはよかったし、実際に、このホテルを愛した日本人・外国人は相当数いたのであろう。しかし、時代に先行し過ぎたきらいがある。それが、望翠楼ホテルについて残された記録がきわめて少ない理由であろう。『大田区史』も、「大森丘の会」についてふれたのであって、ホテルそのものを取り上げた訳ではない。1939年（昭和14年）に刊行された篠崎義雄ほか編『大森区史』（東京市大森区役所）にいたっては、望翠楼ホテルについてまったく言及していないのである。

望翠楼ホテルは、日本のホテル史では影の濃い存在ではなかった。大森ホテルとの競争に破れたのかどうか、静かにその姿を消した。しかし、東京におけるリゾート・ホテルの先駆者として、望翠楼ホテルは永久に記憶されてよいのではなかろうか。

8

付表の日比谷ホテル—のち、東京ホテルと改称—が1912年（大正元年）12月以前の発足としたことにつき、説明を加えておきたい。筆者は、この日付を次のようにして知った。

日本図書センターが『明治人名辞典』上・下を刊行したが、これ

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。 国立国会図書館 2013年9月13日

著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。 国立国会図書館 2013年9月13日

は1912年（明治45年・大正元年）、中央通信社が上梓した『現代人名辞典』を底本としたものである。『明治人名辞典』、下巻は1987年（昭和62年）刊であるが、筆者は同書「キの部」26ページに、日比谷ホテル専務取締役の菊沢亀一郎氏についての記事を見付けた（写真が添えられている）。

菊沢氏は1876年（明治9年）11月10日、愛媛県に生まれ、上京して日本大学を卒業、2、3の会社に勤務したとのことであるが『明治人名辞典』によると、「大正2年7月同志と共に麹町區有樂町壹丁目三番地に株式會社日比谷ホテルを創立して取締役となり専ら之が經營施設の任に當る同社の拂込濟資本金は五萬圓にして中島亮介河村吉藏と共に取締役となり松村義村山保次監査役となり日に隆運に向ふ」という。

株式会社日比谷ホテルが創立されたとき、ホテルが開業したとは限らない。むしろ、開業はしばらく経過してからであろう—とくに建物を建設してから開業する場合は。しかし、右の記事では開業の時期は書いていないので、会社設立時をもって開業日とするのも一つの考え方であろう。

しかし、The Japan Times には、日比谷ホテルの広告が1912年（大正元年）12月8日付から出ている（第5面）。このホテルは、明らかに1912年12月またはそれ以前から営業していたのである。

それでは、右の『明治人名辞典』下巻にある記事は何を意味するか。

—筆者は次のように考える。日比谷ホテルは、1912年12月8日付の新聞に広告が出ている以上、この日またはその少し前に開業したと見るべきである。しかし、おそらく最初は個人営業で、翌1913年7月、株式会社に衣替えしたのではないか。1872年（明治5年）創業の築地精養軒（のち、ホテルを併設）も、北村重威が個人的にはじめたものであるが、息子の重礼の時代が過ぎ、3代目精養軒主となった重昌は、1918年（大正7年）、精養軒を資本金100万円の株式会社とした（本誌1992年11月—1993年12月、1994年2月、1995年2月、10月、11月の拙稿参照）。これと同様に、日比谷ホテルも創業後に法人化されたのではないか、というのが筆者の考えであり、付表にもそのように書き込んだ。創業を1912年12月としたが、それ以前であった可能性もある。資料が発見されれば改めること当然である。

＊　＊　＊

付表について、なお1、2の点を付け加えたい。

(1)オテル・デ・コロニー（フレンチ・ホテル）は、南小田原町3丁目で創業した。しかし、1872年4月3日（明治5年3月26日）の「銀座の大火」で焼失したときは居留地18番にあった。翌年に再建されたとき、場所は新栄町5丁目6—8番地であった。しかし、1875年版 The Chronicle and Directory の325ページは次のようになっている。

Hotel des Colonies No.18

F. Ruel

A. Michel

すなわち、経営者のリュエルは、1874年（明治7年）ごろ、ホテルを新栄町5丁目から旧所在地の居留地18番に移したと想像されるのである。

それでは、オテル・デ・コロニー（再建）はいつ閉業したか。筆者は、これまで1877年（明治10年）以前と考えていたが、もっとはっきり、付表に1875年（明治8年）と書いた。「居留地台帖」（東京都編・刊『東京市史稿　市街篇』第54の196ページ以下に活字化されている）を読み直した結果である。

居留地18番は、1870年7月1日（明治3年6月3日）、イギリス人の「ライゲン」が借地権を獲得したが、筆者はライゲンは横浜にあったオテル・デ・コロニーのエージェントであると考える。横浜のオテル・デ・コロニーは東京開市を待って首府に進出することとし、南小田原町3丁目の日本屋敷を借りて開業したが、厳格な意味での居留地に地所が造成されるや、ライゲンを派遣して18番をせり落としたのである。

「銀座の大火」後、新栄町5丁目にホテルを再建したが、やがて居留地18番に建物をつくり、ホテルを移す。それが1874年ごろと考えられるのである。

しかし、「居留地台帖」とによると、翌1875年（明治8年）7月1日、18番の土地・建物は米国人の「ジオージ、ダブリユ、ウアンホーベンボルフ」に譲渡される。土地は借地権が移るだけであるが、ホテル建物は売買の対象となったのであろう。「ウアンホーベンボルフ」はホテルを引き続いて経営したのであろうか。あるいは、建物をほかの目的に使用したのであろうか。

いずれにせよ、18番の土地・建物は同じ1875年12月30日、スコットランド一致長老教会のフォールズ（Dr. Henry Faulds）およびマクラレン（S. G. McLaren）の手に移る。同教会の牧師館となったのである。

ライゲンが18番をホテル用に入手し、「ウアンホーベンボルフ」が引き継いだのであれば、オテル・デ・コロニーは1875年12月かそれ以前まで営業していたことになる（ホテル名を変更したかも知れない）。そうでなければ、ホテルは同年6月またはそれ以前—同年前半といってよいであろう—に閉鎖されたことになる。いずれにせよ、1875年までの営業であった。付表に「1875年閉業」と書き込んだ理由である。

(2)1903年版 The Japan Directory の158—159ページの間に、やはり付表に載っているオテル・サントラルの広告がある。当時はドゥートルリーニュ夫人（Mme I. Doutreligne）が経営であった。外国人人名録にはホテルの広告が多く、これも貴重な情報源である。

それはともかく、ドゥートルリーニュ夫人はフランス人であったが、1910年（明治43年）5月18日、ホテルはアメリカまたはイギリス国籍と見られるウィリアムズ夫妻（Mr. and Mrs. Irvine Williams）の手に移り、ホテル名は綴りは同じであるが、「ホテル・セントラル」と発音されるようになり、さらに「セントラル・ホテル」となった。このように、ホテル名—少なくともその発音—が、経営者の交替などに伴って変わることがあったのである。

(3)ホテル愛宕館が「東京ホテル」となったのは、1904年（明治37年）ごろである。築地居留地にも東京ホテルがあり、また日比谷門見付にも同名のホテルがあったので、3つ目の「東京ホテル」ということになるが、いずれも営業時期はずれている。各地に似た例があったと思うが、やはり同じ名称のホテルが同時に存在するという事態は都合が悪いのであろう。